九六

遠山奇談巻之四

○第十六章

紀の御方を伴ひ一寓して
此来洲みて出吉ふ市とよとし

はつこ年のころ都へのぼりまゐらすと同じ人に告知
せざりければ寛政と改りし夏にもなりぬれば彼山々を
たんぽうせんと下司二人僕をつれ出で来りぬるに
路の案内うくがうにしとくそこぞめぐる七人の内りを路
とりくりて遠山の嶮岨へふちむかふ案内をまたし紀の人は深
山馴ぬるしられば嶮岨のさるどれにいとはりくと其に力
とそへ路をとるとやすく小畑村へ着ぬるぞうれし
あふくはじめのごとく山入の洞窟ども見ればへとくの

あくまで修へ猟人もされのごとく甚しれをつれ窟の辺まで
又出来洲にかり立しとらん去年のそれとは見ゆりく
紙れの後うる由ゑ洲の跡ありて教ゑふこられいよく
嶮岨いやましくおそがりたしれい山ま面より其の峰と越
んとしくめぐりてけるふめぢましたる大猿まし岩ゑはい
去年ふ郎ろうこちしやまさる処へきずらいは大猿の根深ゃまぐ
人ゃり先ふ行けるがかやし小刀抜揃ふて元二百余もあばし
が此猿のりくもてせらけ麿そてたるもあり又猪ろうも
あり矢根は元をあやり猿りくまきり岩間つぎ員どつくく
奇妙なる為ありとさけび常と呼あへいまだ行しかくて

こころ不足い天物不足なるべしと云て寸法に決板ろ
ろくきをろをとさまをていろる反板ぐも制しれ〳〵ぐ
ちろしたあるれば板をんく迄と数板ち大ふいりいや芸る
のを寸をも義たるとを拾とりてさ〳〵人道のはるるにまして
寸板のるゃいろるあるよをとゆあるりり〳〵ゆ〳〵あふ数
ゆくいいりのぐ〳〵制しれば無全板をるさてあるち
とろふ横をれありあの〳〵ふをしそれり諸名須持
の人をとをのをて一巻とあしぬゆ見び濁りぼふ〳〵寸就こ
非所いぐりりう〳〵寸法に法ふあるれるさるみく鬼
角見ぐふ寸法とこく登しふいるるしうとく喰成長

寸とてこうてい揚とりけく〳〵喰るていれのくいちとをんく
聚のぐるふ寸法にいしく見ぐふ引ぐも法をい喰り寸ろり
かるそいれるさるるるれるるてふるて決ぐふつのふ
寸法寸法〳〵引るく名反年ろく寸法をとをひ変とりけ変ひ
ゆけば寸法と板ふく〳〵喰る見引延喰みくも出つるていぐ
いや喰みているく寸みくるる見れむしとて寸るれば寸年
みくくるふ仏ゆるんしふるんぐ寸ぐくしてるふちぐ〳〵
引ちく〳〵ゆく〳〵いでも板いさむ体みるるぐつのふ円ゆゆれ
るるく名寸法ちふるる反又年ろ引七は見ゆる
ぐく〳〵板〳〵ゆぐるてをれとるんるふ寸法ろんぐ〳〵ちをけるり

呼さけべども樵のひゞきも二声ぞらばせんかたなく平為は
けしとんでおつけれバるめて井どろき是杖をひろひて三人で
手をかけしてうんあんべしと中合んとすぢをはげしくふ平七は
谷の底は濁し人の足跡あるとつくし是を見てといふ中に
二組まではちら谷底さしてみちより揃てたる岩根をぞび一
くちスナむ空しも出られし藻布いとしさごく足あしもつかみ
こえてげはわなるも無ぬなつてふ出られて此方の方へたちすきれ
喚咽ありしありり休息る間に晴天俄まりくもり雷鳴
ふるあとひゞききくさしようも震しく大雨車軸をさかんくう
電光眼をくらし危さいふ中ばし本陰の藤をおまやとうと

いづくも木もたくてそろへしくるへおそろしさいひのうどほし
晴間をはかりふ付をとりして中の刻とも世にも消冷雨つき
岩谷のつくぐるつくしてあとしそれ是業報のいとれあろやう
かひろしてまとをししぬけりは都の人〻ふあやおちたりしべ
いかでせんいざ忍ばって村方ふ下り村の人〻をきこえ夜
とすふはかれべしこれにいは是ふ給べしそのしそてとくろ
ござしといへバいづれも心得てあがりとてもけわふ月明を
結し葛ともわれし忍ばふいぞうひ行じしてつかぶうしさも
ありさもん窓んまちぃぢつに数羽幡は像ふくれけるもせよ
岩谷けらふまよひしとひは宮くめし悪跡のためにつるりし

分と果さんとしてこれを弘ろうとされども平生業成のみるしへにて性生い銀りるべき日のあれば後ろ
でんはまどろうまで此山い神仏山内濁法山のこうれば
山住大権現の法寺ろうこれい則熊野十二所八幡地
い那弘陀如来此山中ふかく分入もみのりの義再び建
立いろうたたろうりみ山の法ろうさふえろうえろうも
あるべ岩石い法滝のはろうしいろうもあるべ
やく仏付ろうい仏恵の経学ろうるべしろう補紙
めるべ因りもそれ引立られ法仏とくげろう仏恵と
祈でろうり

○きと山去法巻之四

○四

第十七章

岩石ふわひもろくぼへれうり
天狗につらまれるものと考へる事

白雲ふうたる峯もやゝふ峰岩石うてざるふかうて
れとはまてすてとはいうぶん村里へ吹しとちかこと
かうくも出ぬんとすに年ものいまれ向ての岩のうに
行やんんげうてけるとなん清くちくうんふたー
ふ岩石うんをとけ清く変付りぶふいよく
岩石くいづれも山法のちひふく岩石の側へ高原
ふ岩石色色ふうりみくを色清くとうらひし
ぐんとちる清ふ岩付ものをたうき清とうれば設も
紀衣裳も清び砂色眼血ぐらも粗氣のぐく文ふ

岩人うくぶいづれもあれかも無佐方　鬼れちはぐ
ちうを色へ中くに岩和のうちへくいんつほ　ん
ちうくく岩石が静ふ色ぐいうを考ふく岩石ふ向ひ
大切の月さたうふいづくへ清や去る○山へせふ物刷て
ものもたくび物くを去るとる仏ちも山へ深山路ふ蹟
ましひ色鼻もたりうく因清も物ものをたる色へ久
のふづしそんうを色いぐうんじい佛敵ものぐー
云岩見のの石色者なんぐ色ようへ大木のしと海
ぜんぐをくせくく函岩ちくぶいう居くく仏氣はして
いうりそれば岩石やくく物ふちうへやんくとうんあり

うらみごとさへうづくまり涙とぞふくミける後はたし
うなりやゝ人々うちより介抱されば誤りしこゝろなく
うちさけれたる由息人々まろびが日もなや
入おのゝきされバあかりそれ行どもふやましく
岩吉を介抱しく諸久須村へ見ふかり旅日の心を
ふつかれくし旅ふ行ども疲れてび出岩吉とかまれ
あぞりおつゝぞ夜とたゝしれさて岩吉ふめぐり会
嬉しさ限りなし互ハ足と体ゝ酒ふでまもむべしとて
百文余りりく小畑村まく酒と宜しの日行返と
うきむけ、旅ふ興しまれ日ふ岩吉ふ對しきのまみ

さるをとてたし聞ふ岩吉いそんとも〻ふ涙ふむせび
そのよ年かくぞのされと床ふせし時病おこしたられ
けまくれ人もそうかりしが行つらく瘴煙ふ犯され旁も
従てふまく〻あけしが不図目を見んしめらふかれと捨行れし
ぞあらむるやし恨いりて行程十方ふくれ途畑なけ
あるくして禽獣とかざむしきじごくあるがそれより後ハ髪て
だ又何のもけゑ髪てわざ震動雷電して風雨にひきさる
其付名れ地さ不うれ由山中いくんさうくめしく
胸をせまりしかどもいへんもせんかさうてせいろかの餅
けうじ念仏しかり此念仏ふひつき日数の経学あ

[illegible]べ[illegible]けさい繼後せしそと仏付りとてもけるくぬ
けさるしんとうちつけ仏事うく怠慢しうが[illegible]
[illegible]ふ[illegible]ひ[illegible]も吹[illegible]
[illegible]ものるしもうく[illegible]てもく[illegible]ふ[illegible]有られ[illegible]出のとに
下[illegible]ものが[illegible]よ[illegible]もとひ紙とれらむうん
[illegible]て人[illegible]なしが[illegible]ものもれ[illegible]られ
[illegible]のものうらうりでくしたしふ[illegible]
[illegible]りくれべやく[illegible]ふ酒のうひもけるせく[illegible]
山[illegible]とやく[illegible]て[illegible]れい全く天物の[illegible]
とつ[illegible]ないとべて天物のくと牝とい多く慢仏の[illegible]

と[illegible]る天物ハ元广魅の[illegible]く慢仏のく和[illegible]に
通[illegible]とく[illegible]ふ[illegible]しるもの魔界ふ[illegible]ー天物く
[illegible]ー魅天魔[illegible]ー我慢仏と牝[illegible]のもれと
[illegible]ー魅とる[illegible]ー先[illegible]ふ[illegible]
[illegible]もとるしんとみてて天物[illegible]とせくすてふきの天
物のもちくしく天物と[illegible]ー全く物[illegible]
慢仏[illegible]れ[illegible]ふ天物ふつ[illegible]
天物[illegible]ふ[illegible]ー慢仏と[illegible]て天物の[illegible]ふ
[illegible]ー[illegible]ふ[illegible]
[illegible]ふ冬[illegible]の[illegible]千年の[illegible]

同義ありしに数百の僧歴々おれども是ふ義をして射する
あうと数日同義濃沢ありて廊下にて人数の接待
ありて世び諸僧とくく学中へ集りて場ふをつとうの
老老接待のとくく場とくり此僧中ふ歴々もあふ知ふ
まれる僧もたぞく不図授仏せられ世び義沢ありて歳末
四く大衣を崇る僧長くの知識と法ぞる正面ふ曲彔を
しかれくくふ海湾の沖ふ行るんくくに出くくを立む
出ふ ぞくちい考るに紙慶流陸ちくけぞて仏つと
ゆとと携へ月渡へ氷中浮立天く一句の偈とのくゆとと以
沖とうりふ急ち去未接待きくざる間へゆとともて

沖とうくちいる廊下の欄干ゆとゆ打れす
此時まにち死くく此沖ありしくく此老ハさでに魔界ふ
誘ひて天魔の首領ふうんとぞり先去の授仏い天物
胡くくてたぞうくく評ぞ此りも入あうれり

○第十八章　天物のことといひて法紙とよろぶ事

此日も言ぬれば同り五義沢のいうるとたー
ぞりり以上先去を名仏者うふ天物よ化さるとは
仏会ざるくまれど此ぞるのふ付数相ちる
とうゆとふいるべ名仏者くくも業結ちべ行ふは
ちん死の縁を去くあれば是ふ沢べべ去ふあれど

善佛者は、のうのうしくして、他のまどひをはなれ、
ふかく常に懇愚ふ独閑にして、
はるかに天地の間に、万物の長し、道人間にあれば
万物皆人の感ふ恐れにあらざれども人の人たる道と行
ものにいたりて感とうるいづれも必隆平間のうれく
行ひうえなれば天物も恐れ狐狸もまた
らて若し人の人たる道に行ひ心れくのしるれば感
ひとしうれども釈の心と体ひとりの行ひにあの
うづみくもなれども真さへ出づて邪人釈と
出りとげのもうふ作くい釈の丸とうるば

釈やそ家のしるとあれさへうるものあるれば
仏道行中にもしべらと信ずし他力の信
横新のしるいうるる高善ありくはいるとり
守身にうるるいなんとくもかた半ふあうるべく
人の人たる道とそさへ感とものと
とすりけふあるうるり正定聚ふりうるるうふ
いあるるんねで光明のうちふ摂取をしるるきけ衆
りの時さるいんるさは けしふあるうるべさりとい
くうりえうし私分に私あるうるる必隆平間の
ものや仏海あるる我れにあるべ一念の信心頼報

のぶやすより兵のかるめくくどろく狼狽とさわり
みのりもの徹せざる由、弥わるものとさるこ わさいん
行ものふも人称こつく紙うんしまぎらしとこ
ろ、ちいさふ出びの用のおれ道はとまつ、こ、こ由
こ、とこ思ふ侵れと天狗の朝こ、これと狗ちうん
天狗のわきふわうびあるこれりあるふわうこ天狗
のこふちうこ、こびくまうびて西とわうこ

○第十九章 [illegible]退いる事

かくて己入見るもや異めんば都方の役目の大木
いづれも老功の同列迎ふ達ぬ由、こびくに時の

ちとせ　横山して初へ始れしとそれより初方ふつ
ゝ法師始り冬の初はしめ又六人のしとしろ々会
い大木と紙出ぬ　始れが見ゆり　ふ〻初〻へ
人とりつく　松月庵と組俳すふつゝ人もそろひぬ
松方月庵と六組に引け十人で初会〻九十人之
月庵とは組ふ　一組ふ百人で初会百人たり
元會初〻ふの中会有〻ふのとたて　俳役人
い交人数あり　松月庵の初るもの七義初ふ
人数二百十余人　表月四日ふ青崎ふ西澤ふ始。
高沢。俳り沢〻ふ〻へ　斧立見ん　斧ふ小春と

三つ〻ひいれば根代ぜんぜんまでにみ度の幕紙をそのまま
乗は半のおもてにふそびらを帯りる。ところにたいへん
上の山を松頭ふたつ組下十六人帯りをする三ヤのの
ろうるびをとるふ、黒れば、しくるつ炊の表の表
中の使半におなじへ出るふ。ひるーん物わりをうびる半
のるる。ちうもなるびと井ごろきいるだを物りふたつふ蜜
に芸ぐ。おるれるふたつ由之弟そるたる。小を屋曇表と
おしそれりひつぎて芸ーる寄る弟おりふたつりてはいたハ
蝉るびしとけりりるくーれとつげ。ひふたとれゆるーうへハ
縁体紋令ーいるる。ちうれどよ会とてえかべ仕物

ーーたあしじ。ひるうとてべーびひ十六人五会と拳
みーー一度に聲と会ーーかーーん。紙ーー雷鳴ーへ弧
の方へ斬ーーもべーーーひ会せーーる。花とーー張ーー。
皆ーー裳束ーーーけ彦一回ふ斬ーーーれば。けーもの
媛帝もーるりる。ひるべ三るふ小ふいべーかーる。
ちーぬ首の方へ二人へ令張よ鶴ーーが。つかふうちる
ーり。さて表中ーるる由ふ人教と改ーるれどに。ひの
検紙あれども厨ーりのーーふーーべ。ぐーる首とーりあげ
ていーりし像八ふ半ーるるーり。日へ日月ひべーー光て
にとひーきひーる撃ひ鍬よ一表ふるるべーるるふ

おもて迄のりそれど紙帝ゝの四ぐでして斬くめるせつなき
いうるふ高つ雪義もそびはたりゝゝ焼失とつゝし
て木張とゝゝひ休ゝれぶ。たぐらふ夜もかゝりひけ
ゝ張殿中へ若ゝゝゝたゝ童のもれられゝゝ
ゝせ先りあやもちゝゝと板びふ高紙の中六人ふ力
とゝくゝいるゝりけよ此ふ金造い八ゝふそれとゝり
ゝゝあ四へ九ゝゝも長ゝとゝりゝゝひゝり。いゝゝ
前の大さとゝれゝゝゝもせよ大あく前い四人ふ前の
叢い行ゝゝゝ此はいゝゝるゝゝゝゝゝゝゝ。日く
に山中へ人ゝゝて板やゝれゝゝ近山のゝゝゝゝゝ万年

自中ふゝれり。低いゝゝ材木い川ゝけゝゝ焼酒屋
谷いゝゝゝゝ谷川とゝゝふゝりてい十三里の沙れ
天地川へいゝゝゝ。此川奇と称ゝゝゝ流ゝゝ三十里の
ゝとゝゝゝゝ抑源流ゝ木い芝ね。八ゝゝの星ゝ
傳ゝゝゝ徳志此ふゝゝゝ都の大堂再びゝゝ
ゝゝいゝゝありがゝと歌長かぎゝゝ

○中二十章

（きと山のうち二十八の山名　大木代出ゝゝゝゝゝ）

大木代出ゝゝゝゝゝゝゝゝ二十ゝゝ　吉谷山
梶谷山　池ゝ山　滝沢山　上沢山　庵沢山　鷹ゝ原山
中白山　小笠山　柳沢山　伊谷山　程沢山　月新尾山

利根山　馬入沢山　西沢山　赤澤山　戸中山　姥代山
神頭山　一しほ山　湯沢山　庚沢山　猿沢山　丸畑山
姥代山　木の根　梅　桜　根沢　姫小松　栗　そば
ちかくの山々　ゆくさきまれなる所。又里
ちかき山々　里ありて　いとも。保山の人々は里へ
ゆくこと　里人　いとまなし　男子　女子　ともに
ものしづかなり。世俗の山入りあるれて　おのづから
山びとのさいとくとなり。又奥山へゆくこと　とても
ふつうの人　ものぐるふ。いつくに　ゆくとひきて　ゆく
のぞくかぎり　無　なること　ゆるなり。山住の人は

私の大学のこと　ふりくに　里の　ものしらぬ　こと
しも　全くかけの　ゆめ　みぢ　見　ゆる。世俗　千渓
ありること　なり　ものぐるふ　ものしらぬ　ものと
ものしる

平安李香堂藏

さと山雪渓巻之四　大尾

蓮如上人御一生記繪伝

御一代の御伝記と
南流御門主の御事蹟の
あつらへとそしるまと
全部三冊 板行出来

全真道西いろはうた

蓮師の御直伝ありがたきのみ教りを
乃西まぶれしとくりくうつしまろびの
物語しるしもろまと 小本全部一冊出来

京安心いろはの繪抄

京安心のこころもちといろはうた
しくしろこびの物語しるしし
平易を入 和編一冊

たゝ市内しるし内発売不幸也

寛政十年戊午四月發行

平安書林

寺町四条上ル町 錢屋利兵衛

寺町六角南角 蓍屋甚助